

題目 受けた大恩は恩送りに発展するのか―場面想定法を用いた実験的検討

氏名 小松遼貴

指導教員 竹澤正哲

人間は地球上に存在するあらゆる種の中でも、殊更に大規模かつ複雑性・多様性を持つ高度な協力社会を形成しながら今日までの発展を遂げてきた。その一方で個人の多くが私益のみの追求行動をとるのも事実である。これらの事実への整合的な説明を期待されているのが進化的適応の視点であり、私益追求などの利己的行動は勿論、協力などの一見利他的な行動も行為者にとって生存・繁殖などの面で適応的となり得ることが多くの研究者が明らかにしてきた。しかしながら、協力行動の中には実際に観察されているにも関わらず未だ適応的基盤が明確でないものも数多く存在する。その一つが「誰かに助けてもらった際、恩返しする代わりに別の誰かを助けること」を指す恩送り(Pay it Forward)であり、これは美徳行為として広く観察されながらも、多くの相互協力原理と異なり返報性が限りなく低い為に適応的とは言い難い。本研究では、北大恵迪寮の文化としてある程度一般化している「ごつつあん(入寮2年目以上の寮生が1年目の寮生に奢ること)」が恩送りによる協力行動だと仮定した上で、寮生を対象に恩送りの発生要件について調査を行った。その際には適応的基盤の脆弱な恩送りの実在について場面想定法による質問紙実験を用いて探究を試みた Kamura(2014)の実験手法をモデルとし、追試も兼ねて質問紙実験を行った。その結果、下位実験を含め6度に渡る実験にも関わらず恩送りが現出しなかった先行研究とは異なり恩送りが現出した。また、寮内において1年目の時にごつつあんにされた経験に対し、強く恩を感じた者ほど2年目以上になってからごつつあんをするという結果も示された。これは恩送りの内容にも合致しており、「ごつつあん」が一般化している恵迪寮で生活する寮生は恩送りをしやすいと仮定することができた。加えて、ごつつあんをすると答えた人の多くがもし入寮時にごつつあんの文化が無かった場合にごつつあんはしないだろうと答えていた。今回は恵迪寮という狭い範囲での実験に加え、サンプルサイズが小さく追試も重ねられず明確な答えを得るまでには至らなかったが、これらの結果が出たことで恩送りの適応的基盤が個人の所属する集団内の社会規範によるものや、世代交代を超えて集団組織を維持するためのものである可能性を見出すことが出来た。今後の更なる研究により恩送りの発生要件とその協力行動が持つ適応的基盤の解明が望まれる。